

田中晴子

拾わせるもの

洗濯物といっしょに部屋にまぎれこんだ

一匹の黄金虫

夜十時になると活動を始める

そのはげしい羽音に

おそれおののきながら

窓を開け

息をひそめて

飛び去るのを待った

あの日以来

アスファルトに転がっている

黄金虫の

亡骸を見つけると

拾って

土に還してやるようになった

虫を触りたくはないのだけれど

でも

しかたがない

羽音が聴こえるから

いのちの轟きが

胸に宿ってしまったから